

## 優秀賞

山川 悠斗（やまかわ はると） 松枝小 4 年生

作品名：家族ですごす毎日の幸せ

図 書：ふしぎの国のレイチェル

ぼくは、『ふしぎの国のレイチェル』という本を読みました。この本をえらんだ理由は、エミリー・ロッダさんの本が好きで、表紙にブタがとんでいて、おもしろそうだったからです。

この本は、想像力が豊かな女の子のレイチェルが主人公の物語です。そして、レイチェルはかんぱん屋さんのサンディーが描いた、スケッチのような奇妙な世界で、ふしぎな体験をします。

それは、こんなふうにして始まりました。レイチェルはカゼをひいて家の中にとじこめられていることに、あきあきしていました。

「あーあ、ほんとうに何か起こるといいのにな」

お見まいにもらったサンディーの絵を見ながら、レイチェルはサンディーの言葉を考えてみました。頭の中で思いえがけることなら、絶対にありえないなんて、言えない……

気が付くとレイチェルは、広い野原の真ん中で、ユニコーンに乗っていました。空にはピンク色のブタたちが、ぷかぷかうかんでいます。

ぼくがこの本を読んで、一番心に残ったところは、毎日がたいくつで、あんなにおもしろい事が起こればいいのにと思っていたレイチェルが、奇妙な世界に来てみると早く元の世界にもどって家族に会いたいと思っているところです。ぼくはこの部分を読んで、レイチェルと同じ気持ちになりました。

なぜなら、ぼくにも同じように、夏休みに入院をして、たいくつな思いをして家族とはなればなれで一人になり、その時にどんどん両親に会いたくなって、家に帰りたい思いをしたからです。

もしぼくがレイチェルと同じように、奇妙な世界に一人で迷いこんだらと考えると、やっぱり早く家に帰って家族に会いたいだろうと思うからです。

ぼくは、初めての手じゅつにドキドキしていましたが、両親が帰って一人で夕食

を食べていると、だんだん心細くなってきて、さみしくなりました。(いつもだったら、家族四人で夕食を食べているのになあ)

そして、消灯時間になってもねむれず、かんごしさんを三回もよんで、十二時にやっとのことでねむることができました。これも、両親がいなかったからだと思います。

次の日に手じゅつが無事終わりました。前の日に両親が早く帰ってしまい、すごくさびしかったので、その夜は夕食が終わるまで両親がいてくれました。ぼくはその日にどうしても帰りたかったけど二泊三日の入院予定だったので、がまんするしかありませんでした。だけどその夜は、ちゃんとぐっすりねむれました。(明日になれば、家に帰れる…)

ぼくは帰る日が決まっていたけど、不安で仕方なかったのに、レイチェルは自分で帰る方法を見つけなければならなかったの、ぼくよりももっと不安でさびしかったと思います。

レイチェルが元の世界にもどってきた時に、父親にだきついて言った、「とっても幸せなの！」という言葉が、とても心にひびきました。

ぼくも、家に帰った時、和室で大の字にねころがって、「やっぱり、家はいいな」と思いました。

僕はこの本と、入院のけい験から、家族ですごす事のできる毎日の幸せを学びました。これからも健康に気を付けて、家族で毎日を変わずに楽しくすごせるように心がけたいと思います。